

クマの楽園 極東観光の目玉 ロシア

2頭の子を連れたヒグマの母親が湖畔に現れた。電気柵越しに、わずからず先に立つ観光客が一斉にカメラのシャッターを押す。野生のクマたちに人を怖がる様子はない。座り込むと、子グマを抱えて乳を飲ませ始めた。ロシア極東・カムチャツカ半島南部の自然保護区にあるクリル湖周辺には、約400頭のヒグマが生息する。基本的に単独で行動するクマを同時に20頭以上見られる時もある、世界でも珍しい地域だ。

日ロ首脳会談でプーチン大統領が開発に意欲を示したロシア極東地域。目玉の一つが、雄大な自然が手つかずのまま残るカムチャツカ半島だ。ロシア政府は国際的なリゾート地にしようと、昨年8月に中心都市の一角を観光特区に指定した。1980年代まで国民でも一般人は立ち入りが規制された地に、世界中から観光客が訪れ始めている。

(カムチャツカ半島クリル湖 中川仁樹)

デジタル版に動画

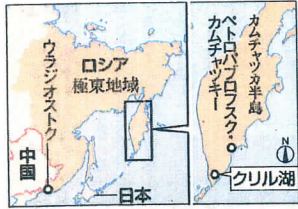
10面に続く



親子のヒグマ。観光客との間には電気柵がある。後方にはテントや食堂が並び8月5日、ロシア極東クリル湖、矢木隆晴撮影



「カサノバだ」赤いサケ狙うクマ



1面から続く
湖の中が、赤く染まっているように見えた。カムチャツカは7種類のサケ属が見られる珍しい地域だ。特にクリル湖には大量のサケが上ってくる。鹿卵に近いベニサケは体が赤くなる。その群れが浅瀬に近づいていた。背びれが時折、水中から出るたび、パンヤパンヤと大きな音がする。

ヒクマがサケを探して、湖をじっと見つめた。狙いを定めると一気に加速。豪快に水中に飛び込む。捕まえると、尻尾を上にしてかぶりつく。

「ゴリ、ゴリ」と骨をかみ砕く音が湖畔に響く。特に卵(イクラ)は大好物だ。残りの身を捨ててしまつてもある。

電気柵で囲われた居住区

カムチャツカ自然と人が共生



①早朝からサケを求めて湖畔を歩く親子のクマ＝8月7日、ロシア極東クリル湖
②居住区域の周囲には、クマよけの電気柵が張られている。感電しないよう注意を呼びかける看板があった＝8月4日、ロシア極東クリル湖
③サケが上る川の近くにあるクリル湖西岸の居住区域＝8月4日、チャーターヘリから
④ベニサケを捕らえるオスのヒクマ＝8月6日、ロシア極東クリル湖
⑤取材する私たちを見ておびえる子グマ＝8月6日、ロシア極東クリル湖
⑥カムチャツカ半島南部の中心都市の港では、新しい旅客ターミナルの工事が進んでいて＝8月8日、ペトロパブロフスク・カムチャツキー、いずれも矢木隆晴撮影

観光客急増 密猟対策にも力

カムチャツカ地方の中心都市、人口18万人のペトロパブロフスク・カムチャツキからクリル湖への移動手段は、基本的にヘリだけだ。約2時間かかる。不便な地域だが、ヒクマ目当てに湖を訪れる人の数は、2007年の約290人から15年は約2700人に、10倍近く増えた。

電気柵で囲われた約1平方分の「居住区域」は湖周辺に2カ所ある。簡易ベッドが置ける大型テントは09年、水洗トイレは16年と整備が着実に進んでいる。14年にできた食堂では、温かいスープなど手作り料理を3食食べられた。

現地で目立ったのは、欧州からの観光客だ。イタリヤから訪れたフランチェスコ・マコガさんは「火山が多くなり、クマが身近で見られる。素晴らしい写真を撮れた」と喜んだ。

ルーブル安を追い風に、カムチャツカ地方への観光客数は、14年の7万6千人から15年は16万人に、1年で倍増した。航空便や宿泊施設の不足に対応するため、ロシア政府は昨年8月、観光特区を指定。今後は官民合わせて360億円(約500億円)をかけ、空港や港湾、ホテル、温泉などの整備を進める。

一方で、カムチャツカには多くの自然保護区がある。クマなどを狙う密猟の取り締まりなどにも力を入れており、森林動物保護局のウラジミール・ゴルシエンコ局長は「対策は過去8年で2倍に増えた。高性能カメラや巡回車両などを導入した」と話す。ヒグマの生息数は、02年の約1万7千頭から16年は約2万3千頭に増えた。

(カムチャツカ半島クリル湖川中仁穂)

域を出る際には、銃を所持する保護官が同行する。アレクサンドル・バラフチンさん(41)から、クマを刺激しないよう注意された。「急に走らない」「クマの目をじっと見ない」「ヒグマは巨体に似合わない。100歩を約6秒で走る。木にも登れるので、逃げ切れることは不可能。『寝たふり』は、走って逃げるよりいいが、効果があるかクマ次第だ」と叫んだ。

「立ち去れ」と叫んだ。親子が目の前を通る。距離は4倍ほど。心臓の鼓動が速くなる。母グマが立ち止まる。バラフチンさんが「カサノバだ」とバラフチンさんが言った。特徴のあるクマには名前がつけられている。カサノバはこの地域で最も大きいオスだという。周囲には、卵のある腹だけを食われたサケの身が散らっていた。

再び動き出した母グマは通り過ぎていった。思わずほっと息をついた。

湖から流れ出る川に着くと、ほとんど水が無い中をサケが懸命に上っていた。林の中から体重500kgはあるかという巨大なクマがゆっくりと近づき、簡単に捕まえて食べた。

「カサノバだ」とバラフチンさんが言った。特徴のあるクマには名前がつけられている。カサノバはこの地域で最も大きいオスだという。周囲には、卵のある腹だけを食われたサケの身が散らっていた。